

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22615007

研究課題名（和文） 陶磁器産地における実地調査に基づく環境共生型生活創生の指針の導出

研究課題名（英文） Principles for Creation of Symbiosis with Natural Environment based on Investigation of Ceramic Producing Regions in Japan

研究代表者

植田 憲 (UEDA AKIRA)

千葉大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：40344965

研究成果の概要（和文）：

本研究は、長らく、環境との共生の生活が展開されてきた日本の陶磁器産地における「環境共生型」生活の実相のインテンシブな調査・探究に基づいて、そうした生活を支えてきた生活原理と生活指針を明確化するとともに、それらを今日にどのように創造的に展開し実践していくかを、デザイン学の観点から具体的に考究・提示することを目的としたものである。かつての環境共生型生活は、生活者の積極的な生活創造力・生活創造欲が形成過程での原動力となってきたことなどを明らかとした。

研究成果の概要（英文）：

The subject research ascertained various aspects of living culture that have been created based on symbiosis with natural environment in ceramic producing regions in Japan. And it clarified the principles and the concepts that have been sustained living culture in those regions. And then the ways to apply them to making a living in the present time were considered. As a result of consideration, it can be said that the living culture based on symbiosis with natural environment has been created based on creativity and desire for living of ordinary people itself.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：デザイン学

キーワード：デザイン、資源循環型、地域アイデンティティ、サステイナブル、内発的地域振興、環境調和型

1. 研究開始当初の背景

今日、世界中のあらゆる国・地域において、グローバル化の波が押し寄せている。万人が物質的に豊かで利便性の高い生活を享受できる機会が得られつつあるものの、その反面で、さまざまな問題が顕在化している。なかでも、環境破壊や地域文化の喪失は、デザイ

ンの領域における重要な検討課題である。とりわけ、アジア、アフリカ、イスラム諸国などの非西洋文化圏の国・地域においては、当該の国・地域の歴史、気候、風土に基づいて構築されてきた生活に、全く異質の価値観が導入され普遍化することによって生じる齟齬が、上記の問題の大きな要因のひとつであ

ると思われる。

かつて、日本の人びとは、豊かな四季の巡りを有する風土のなかで、万物に靈魂が宿るというアニミズムの観念を育み、環境との共生を基盤とした生活を繰り広げてきた。環境は決して「征服する」対象ではなく、人びとは、環境を「人と同等」あるいは「敬う対象」として接してきた。その態度は、「もったいない」「申し訳ない」という感情に基づいた生活理念を形成することにつながり、日本の伝統的生活文化にみられる地域のなかのさまざまな資源の徹底した「適量採取」「全体活用」「転用」といった「環境共生型」の生活文化の構築に大きく寄与したと考えられる。

例えば、かつて、日本の人びとは、主食である米の副産物である藁を余すことなく最大限に活用する工夫をしつつ、さまざまな生活用具を制作し、生活のなかで使用した。また、自然界から感謝の念を捧げつつ「いただいた」木材は、ものづくりの材料として余すことなく利活用した。そうした日々の行いが、日本文化の基層に位置付けられていることはいうまでもない。そうした人びとのもの・環境への接し方は、本研究で取り上げる日本各地の陶磁器産地においも、陶磁器の廃材・端材を利活用した環境創生のなかに確認することができる。

しかしながら、今日、急速なグローバル化が進展するなかで、西洋志向とも言える生活様式の変容に伴い、もはや、環境は共生の対象ではなく、「克服すべき対象」へとその位置づけを大きく変えつつある。そのことが、ひいては、上述の環境破壊や地域文化の喪失などを招く大きな要因のひとつとなっていると思われる。後世へ物質的な豊かさのみならず、精神的な豊かさを的確に継承していくためにも、先人たちが構築してきた歴史のなかから、国・地域に独自の環境との共生、ならびに、生活文化形成に資する諸要素を抽出し、今後の生活デザインに活かしていくことはきわめて重要かつ喫緊の課題といえよう。

2. 研究の目的

本研究は、長らく、環境との共生の生活が展開されてきた日本の陶磁器産地における「環境共生型」生活の実相のインテンシブな調査・探究に基づいて、そうした生活を支えてきた生活原理と生活指針を明確化するとともに、それらを今日にどのように創造的に展開し実践していくかを、デザインの観点から具体的に考究・提示することを目的としたものである。

3. 研究の方法

本研究は、概ね、以下の方法で実施した。
(1) 文献調査ならびに実地調査に基づき、環

境との共生の生活が培われてきた日本の陶磁器産地を対象として、環境との共生ならびにそれに基づいた地域アイデンティティの形成にかかわる諸事実を収集した。なお、本研究における実地調査は、愛知県常滑市・瀬戸市、大分県日田市、鹿児島県日置市・鹿児島市・始良市などにおいて実施した。

(2) 収集した具体的事例の整理・解析に基づき、環境創生を支えてきた生活原理と生活指針を明確化した。

(3) 上記の(1)～(2)に基づき、環境創生を支えてきた生活原理と生活指針を今日の生活にどのように創造的に展開し実践していくかについてを議論し、導出した。

(4) 本研究を通して得られた知見を共有化するために、論文発表ならびに各学会における発表を行った。

4. 研究成果

本項では、本調査・研究を通じて得られた代表的な知見を列記する。

(1) 愛知県常滑市における調査結果

常滑地域における地域においてなされてきた環境との共生、ならびに、地域アイデンティティの構築に寄与する取り組みを概観すると、それらは、いずれも、当該地域の生活者自身が、地域で産出する素材を、自らの手で積極的に利活用する行為によって構築されてきたことがわかった。そうした素材には、今日では、廃材・端材として廃棄もしくは材料としてリサイクルされるようなものも含まれていた。また、それらの活動は、「もったいない」という伝統的な生活のなかで培われてきた生活理念に基づいて、各々の創意工夫を重ねながらなされてきた。こうした取り組みによって、当該地域の環境形成がなされるとともに、それに基づいた地域アイデンティティが構築されてきた。

陶器産地・愛知県常滑地域にみられる「もったいない」の文化の特質は、およそ以下のようにまとめることができる。

①常滑地域においては、「もったいない」という生活理念が、当該地域の生活者の共通の行動様式・生活様式として共有されており、陶磁器の端材・廃材の徹底的な利活用を促し、継承されてきた。

②常滑地域における独特の環境創生は、生活者が主体的に知恵を絞り、身近な材が有する特質を見極め、生活環境や共に暮らす人びとをいたわる心の表れとして継承されてきた。

③かつて、主要な生産品であった土管や焼酎瓶、電線管などの生産はすでになされていないもの、今日、当該地域の人びとは、有形・無形の歴史的資産をさまざまなかたちで利活用しながら、伝統的な環境共生型の生活文化の継承に基づき、当該地域の地域アイデンティティの構築を図る活動が胎動しつつあ

る。

地域アイデンティティの維持・継承・創生に向けては、何よりもまず、地域の人びと自身が地域資源に対する認識を深めることが必要不可欠である。そうした生活者中心の活動こそが、地域の行政を動かしていることもうかがえた。

今後は、これまでに培われた地域アイデンティティの一層の維持継承を促すべく、生活者自身が、五感を駆使しつつ、環境との共生の機会を取り戻していくことが望まれる。

(2) 愛知県瀬戸市における調査結果

当該地域の環境との共生の生活の特質はおよそ次のようにまとめることができる。

①当該地域の生活環境は、長い歴史のなかで、人びとの生業としての陶器の生産がなされるなかで、陶器の生産に必要な材料や燃料の適量採取・全体活用、出荷できない製品や使用不能になった窯道具などの徹底した利活用に基づいて形成されてきたものであり、人びとの「もったいない」という生活理念が表出したものである。

②当該地域の生活環境の形成は、陶器の生産に従事する人びとの間で、さまざまな神や陶器の生産に用いる道具、先人たちなど、人びとの身の回りに存在する多様な要素に対する感謝や謝罪の念、すなわち、「申し訳ない」という観念が共有されたがゆえになされてきたものである。

③当該地域における環境との共生の生活は、同時代の地域内のみとどまるのではなく、地域や世代を超え広く共有されるものであった。

当該地域のアイデンティティとは、「申し訳ない」という感謝・謝罪の念に基づき、「もったいない」という生活理念が実践されるなかで、人びとの積極的な参加によって、まさに地域が一体となって育まれてきた地域特有の生活文化そのものに他ならない。

(3) 鹿児島県日置市・鹿児島市・姶良市における調査結果

当該地域に継承されてきた薩摩焼のつくり手・使い手を対象とした調査、ならびに、端材・廃材の利活用に関する調査に基づき、日本がこれまで大切にしてきた「もったいない」「もうしわけない」の精神を、今後、どのようなかたちで実践できるか、当該地域の焼き物の文化を、当該地域の「地域らしさ」の創出につなげるためにはどのような方策があるのかを考察するために、当該地域の陶器の廃材の利活用に基づくパネルの制作を、ワークショップ形式で実施した。

その方法は、おおむね、以下の通りであった。(a) 文献調査・現地調査により、薩摩焼の歴史の変遷や現状を把握した。(b) 当該地域で行われている陶器祭に合わせて参加型ワークショップを開催した。(c) 参加者にア

ンケートを実施した。(d) ワークショップでは、「ものほら」にある門司焼の端材を用いて陶片を作成したうえで、参加者に、約 30 センチ四方の板の上に敷き詰めた粘土ヘモザイク状に貼り付けてもらった。(e) 参加者を対象に紙面アンケートを実施した。

その結果、老若男女問わず、多数の参加者が、陶器のさまざまな表情を楽しみをもって観察しながら、およそ 50 点のパネルを完成させた。こうした試みは、陶器そのものへの人びとの関心を高めると共に、自らの住まう地域は陶器の産地であるという自覚を促すきっかけとなったといえよう。実際、参加者からは「こういうことがやりたかった。」「小学校で是非開催して欲しい。」などの声が多数上げられ、住民たちが地域の伝統工芸に一層の愛着をもったことが伺える。本ワークショップは、地域らしさとは何かを、地域の人びとが体得する貴重な手立てとして有効であり、また、伝統工芸の作り手と使い手との協同作業による、地域の景観創造を実現させる貴重な一歩となったといえよう。

今回試作したオブジェは、さらに、当該地域の工房を始め、集会施設や地域を彩る駅やバス停、病院などの公共施設や空間、壁材やプランターへ利活用など、景観への利活用等を展開が大いに期待され、また、教育材料としての利用に対する要望も上がっていることから、将来の具体的な展開に向けて期待できよう。

(4) 環境創生を支えてきた生活原理

陶磁器産地においては、生活者らのブリコラージュに基づく生活創生・生活環境創生を豊かに確認することができた。

「ブリコラージュ」とは、『あり合わせ』の『もの』を、使用目的に合った『ものづくり』に活用していくことである。

ブリコラージュに基づいて形成された生活、つまり身の回りの産物の徹底的な観察に基づき、人びとが豊かな想像力・創造力を駆使してつくり上げてきた生活、また、その過程のなかで発見された「もの」や「こと」の使い方のエッセンスは、どんな儂いものにも命を認め慈しむ日本人びとの精神・気質と相まって、独特の生活文化が育まれてきたものと思われる。

例えば、愛知県常滑市においても、製品のなかで出荷できないものが使い尽くされ使い回されている同様の事例を確認することができた。かつて、日本が近代化するなかで全国に水道が敷設されたが、当該地域では、そのために必要とされた土管や甕など、比較的大型の製品が生産されてきた。それらのなかで、出荷できないもの、あるいは、それらの焼成過程で産出する「ステワ」と称される部材が、しばしば、陶土で降雨時には滑りがちな地域の道の舗装に活用されたり、土手の

補強に活用されてきた。

また、同じ愛知県の瀬戸市周辺には、古くから、日本最大ともいえる陶磁器産地が形成されてきたが、ここで「つくられた」ものは、決して、製品のみではなかった。例えば、当該地域には、今日、「窯垣」と称される特有の景観が構築されてきた。そこに使われている材は、たいていが、使い尽くされた窯道具の廃材であった。その景観は、江戸末期に編集が企画された『尾張名所図会』にもその光景が描かれていることから、それなりに、古い時代から行われてきたことがうかがえる。

他にも、鹿児島県始良市で古くから営まれてきた龍門司焼の古い登り窯には、窯道具や陶片が、当たり前のように活用されていたことを確認することができた。陶器を焼成するための窯そのものの制作にあたって、身の回りにある出荷できない陶器や使い尽くされた窯道具が積極的に使われたことがうかがえる。

上述からすれば、長らく陶磁器生産を行ってきた産地には、一般的に「ものはら」と称される、焼き損じた陶磁器や使用できなくなった窯道具が「廃棄」された場所があり、今日でも、数多くの古い時代の廃陶磁器や陶器製の箱や棚板や柱といった使用できない窯道具が発掘される。今日でこそ、私たちは、それらを「廃棄物」と称しているが、「有用かもしれないもの」を、使用目的が生じるまで、一時的にストックしておく場として観念されていたのではなからうか。その仮説の正しさを証明することはきわめて困難であろうが、少なくとも「ブリコラージュ」という側面からしてみると、その判断はあながち間違っていないように思われる。かつて、人びとは、積極的にそれらを材として、人びとが共同して道や土手を修繕したり、窯をつくる際に活用したことは言を俟たない。

土の道は、重量のある材料や燃料や製品を運ぶために人びとが毎日通ることでえぐれたり、降雨の際に水溜りが生じたであろう。それらを埋め生活し易くしたり、周囲の土手が崩れないようにするために、人びとは、身近な陶片を利活用したのである。しかし、それらは、いずれも、決してむやみに置かれたのではない。いずれの地域にあっても、一定の秩序を保ちつつ、いわば、修景がなされたことがうかがえる。だからこそ、地域特有の素材を活用し、地域の生活者たちの知恵・心が表出した地域固有の美が醸し出されてきたのであろう。

このように、陶磁器産地の人びとは、出荷することのできないもの、あるいは、使い尽くし古くなってしまった道具までをも、自らの生活や地域のなかで積極的に使用することを志向してきたように思える。

総じて、「ものづくり」のエッセンスは、

何も製品として販売されている「もの」だけに生じるのではないように思われる。上述したように、生活空間、あるいは、生活そのものに反映されてしかるべきであろう。

私たちが陶磁器生産を介して構築されてきた文化から学ぶべきは、生活における「もの」は、機能的・実用的な役割のみではなく、さまざまな「こと」を伴い、人びとの精神世界に至るまでをも支えているということである。「ものづくり」における作り手、使い手、支える人びとが自らの生活創造によって生じた文化の偉大さを学ぶもっとも貴重な手立てといえよう。

しかしながら今日では、科学・技術の発達のおかげで、陶磁器の破材・廃材は、たいていが専用の機械によって粉碎されシャモットと称される粉末にされ、材料の一部に混入されるか、全国の舗装道路の路盤材として活用されている。そこには、確かに、使い回す・使い尽くすという精神を確認することはできるものの、その様態は、かつてとは大きく異なっており、生活者にはみえ難く、かかわり難い状況になっているように思われる。また、それゆえに、生活者の豊かな生活創造力が発揮される機会は大幅に減少しているのではないか。こうした事象と照らせば、グローバル化が進展し、国や地域のアイデンティティが希薄化する今日、ブリコラージュの知恵で支えられ、地域ごとに優劣無く共存してきた多様な生活文化は、むしろ消失の傾向を強めてしまうのも当然のような気がしてならない。

(5) 環境共生型生活創生に向けたデザインのあり方

デザインは、消費者ではなく「生活者」のためにあるべきものである。

今日、世界中のあらゆる国・地域で、グローバル化の波が押し寄せている。多くの国・地域が西洋化・都市化へと急速に進む一方で、各地域で展開されてきた伝統工芸をはじめとした、生活者が積極的に創造し積み重ねてきたさまざまな生活文化が、消失の危機を迎えている。このことは、人びとが自分の意思で、自ら生活環境を「こち良く」整えようとする意欲の低下とも受け取れよう。

今日、デザイン領域を探求する私たちは、こうした「生活者」をあえて冷たく「消費者」と呼称し、まるで、「ただ消費することを義務付けられた者」と割り切ってしまうことが常となっているように思われる。かつて、環境共生型の生活創生のなかで、積極的に身の周りを理解しようとするあらゆるものを観察し、その過程で感得した知恵によって、自らの生活を創造するべく心を砕いてきた人びとの、可能性に満ちた創造欲を「消費」の圧力で隠蔽してしまうのは、あまりに惜しい。

生活者らが、製品という「もの」のみなら

ず、「もの」に関連するさまざまな要素をよりよく知ることができるよう、また、そこに内在する知恵や意味や自然とのかかわり方を発見しながら、積極的に生活創生を實踐できるよう、道筋を発見し再構築することこそ、今後のデザインに課せられたひとつの使命ではなからうか。

消費者を再び生活者の次元へ呼び戻し、観察力・想像力を自在に操り巧みな創造を行う地域の「主体」となってもらうために為にも、今後、デザインが対象とするべきは、「もの」ではなく、文化を自ら構築する潜在的な創造力を有した「人」なのではあるまいか。今日、「もの」が意思を持つのではなく、いかに人びとが「もの」を介して意思を持てるか。人びとが薄れゆく想像力に再び目覚めることのできるような「ものづくり」が「デザイン」の課題といえよう。

⑤結果

調査・研究の結果、以下の知見を得た。

(1)かつての環境共生型生活は、生活者の積極的な生活創造力・生活創造欲が形成過程での原動力となってきた。

(2)地域の資源に対する生活者自身の徹底的な観察・理解に基づく「使いまわし」「使い尽くし」の術は、「地域ならではの約束ごと」として、おのおのの地域で異なる形で存在してきた。

(3)上述した術は、今日、生活者の生活創造力・生活創造欲の低下と共に、次第に消失しつつあり、当該の国・地域に特有の「ものづくり」の根幹を継承していくためにも、「ものとの関わり」の再確認・再認識が喫緊の課題である。

⑥指針の導出

最終的に、本研究では、以下の3つの資源循環型生活の指針を導出した。

(a)地域の環境に内在する「もの」「こと」を生活者自身が徹底的に観察し理解する機会を創出する：

自然との乖離が進む今日、地域に暮らす人びとが、当該地域の独自の生活環境を、まさに五感を通じて体得する機会を創出することが必要である。

(b)地域の「もの」「こと」の利活用方法を伝える機会を創出する：

地域社会においては、地域毎に異なる「約束事」としての生活文化が継承されてきた。それぞれの地域における多様な「もの」「こと」の利活用の方法を再確認・再認識し、地域で共有していく活動が必要である。

(c)環境共生型生活の實踐に基づいて構築された生活理念を伝える：

かつてみられた「環境共生型生活」は、今日、「もの」「こと」そのものの画一化、地域文化の画一化や過疎・高齢化などが進むなかで急速に消失する傾向を強めている。本研究は、

それらが消え去らないうちに、そのリアルな実像の集積を図り、各地に培われてきた「環境共生型生活」の再生・創生の重要性を広く人びとに喚起することが重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

①植田憲、生活づくりに寄与するデザイン—伝統工芸がつくり、伝え、残すこと、デザイン学研究特集号 Vol.20-2 No.78、pp.48-53 (2013)

②朱寧嘉、植田憲、宮崎清：中国技術古書『天工開物』にみられるものづくりの指針—中国における「少物」デザインに関する研究(1)、デザイン学研究、第58巻、第6号、pp.69-78 (2012)

③大鋸智、植田憲、宮崎清、江戸期の会津地域の農の生活にみられる資源循環型生活—『会津農書』にみる自然との共生の姿、デザイン学研究、第58巻、第1号、pp.31-40 (2011)

④ Akira UEDA, THE CULTURE OF “MOTTAINAI” SEEN AS SYMBIOSIS BETWEEN JAPAN’S CERAMIC-PRODUCING REGIONS AND THE NATURAL ENVIRONMENT -Part II: The Seto Region of Aichi Prefecture, THE SCIENCE OF DESIGN, Vol.57, No.2, pp.101-110 (2010)

⑤ Akira UEDA, Satoru OOGA, THE CULTURE OF “MOTTAINAI” SEEN AS SYMBIOSIS BETWEEN JAPAN’S CERAMIC-PRODUCING REGIONS AND THE NATURAL ENVIRONMENT -Part I: The Tokoname Region of Aichi Prefecture, THE SCIENCE OF DESIGN, Vol.57, No.1, pp.75-84 (2010)

〔学会発表〕(計3件)

①植田憲、生活文化創生における「ブリコラージュ」—陶器産地における調査ならびにワークショップの施行を通して—、ADCS (Bulletin of Asian Design Culture Society)、No.7、2013年3月1日、高雄市(台湾)

② Akira UEDA, Naoto SUZUKI, Ambassador of Artisanal Regional Cultures and Purveyor of Sustainable Environment—Brought in Sharp Relief through the Seto Earthenware Producing Region, International Congress on Innovation and Creativity in Arts and Crafts, 19, February, 2011, Muscat (OMAN)

③植田憲、日本の陶器産地にみられる「もったいない」「申し訳ない」の文化—陶器産地・愛知県瀬戸地域における環境との共生の諸相、ADCS (Bulletin of Asian Design Culture Society)、No.5、2010年10月16

日、洛陽市（中国）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植田 憲 (UEDA AKIRA)

千葉大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：40344965

(2) 連携研究者

宮崎 清 (MIYAZAKI KIYOSHI)

千葉大学・大学院工学研究科・名誉教授

研究者番号：90009267

(3) 連携研究者

鈴木 直人 (SUZUKI NAOTO)

千葉大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：90568239